

『移ろい』

佐倉尚紀

同じ道でもその姿は季節によ
って変化します。道端の枯れ草
も時至れば、その根からまた
若々しい緑を生じさせます。
時は季節のお化粧係り。散歩
はそんな“時”の移ろいを教え
てくれます。

一・ 日々草の

小さくなりゆく
花びらに
季節の移ろいを
感受して

二・ 降る雪の

降る雪の
触れれば消える

三・

昨日まで
雪に埋もれた
ふきのとう
今朝は負けじと
雪持ち上げて

四・

軒先の
剣の如し
ツララでも
北風去れば
玉露となる

五・

冬に耐え
芽ふき若葉を
つけし枝
秋には紅葉
人目潤し

六・

柔らかな
かぼそき草も
いつの日か
荒地に根付く
力備える

七・

幼子の
弾む身体を
抱きつつ
いつかお前も
若獅子となれ

八・

葉も落ちて
柿の実だけの
肌寒し

九・

ごうごうと
風音泳がせ
家揺らし
窓曇らせて
寒気来たりぬ

十・

新しき
年を迎える

暮れ仕度

雪も出番と

ワイパー走らす

十一・

正月の

春思わせる

暖かさ

コートは重く

心は軽し

十二・

雨が降る

昨日の陽気

何処にいる

雲の上へと

駆け込み逃げた

十三・

朝冷えの

東の空に

あかりさす

十四・

冬嵐

雷鳴りて

灯り消え

石油ストーブの

芯赤々と

十五・

道凍る

きしむ靴音

抑え行く

暗き朝空

窓の灯わずか

十六・

粉雪の

降りし河原の

冬景色

土手の樹木らも

白粉をつけ

十七・

冬

おもむろに

明けくる雪山の

頂きは

やがて眩しき

阿弥陀かな

十八・

春

越後路の

春の装い

にぎやかに

梅桃桜

花そろいぶみ

十九・

夏

夏の日の

朝陽を浴びて

育ちゆく

稲葉に光る

水蚩かな

二十.
秋

田んぼ道

夕焼け空に

背を向けて

家路をたどる

人影長し

二十四.

山手から

群れ来るカラス

鳴く声の

調子合わせて

今日が始まる

母と子の
寄り添う姿
軒下に見ゆ

二十一.
マイカーで

いつも見慣れた

道なれど

歩いてみれば

景色新たに

二十五.

夕暮れて

群れ行くカラス

鳴く声の

調子合わせて

今日が終わる

二十二.
電線に

音符をつける

すずめかな

完

二十三.
傷つきし

子猫救われ